

吹奏楽部の地域移行

～意義と課題、地域のあり方と指導者に求められる資質

地域音楽コーディネーター
東京室内管弦楽団トランペット奏者
エデュケーション・プログラム・アドバイザー
作曲家
桜美林大学非常勤講師
三澤 慶

はじめに

部活動の地域移行、つまり「学生のクラブ活動の場を学校の外に求めよう」とする動きの背景には大きく分けて主に下記の2つの要因があるとされる。

①少子化

長らく叫ばれ続けていた少子化の波は時代を経るごとに鮮明化し、公立中学校の生徒数は1986年の589万人をピークに減少を続け、2021年ではおよそ半分の296万人となっている。

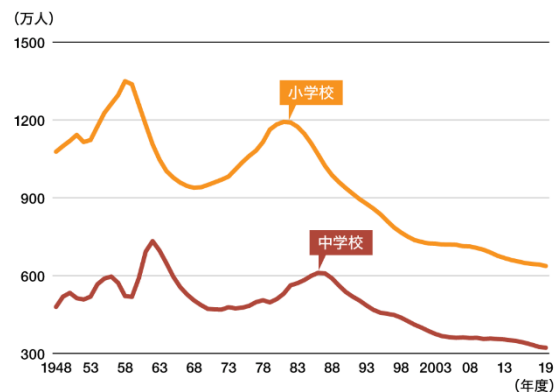
一方、それに伴って公立学校も統廃合が進み、ここ数年では1年で200程度の小中学校が歴史に幕を閉じていると言われている。しかし、学校数減少のペースも少子化の猛烈なペースに比べれば比較的穏やかで、したがって、1校あたりの児童・生徒数が減っているため、学校の部活動に人数が集まらず、チーム競技の体育系部活動、文化系では特に大人数での演奏が醍醐味である吹奏楽部などがその影響を受け、少人数化が進んでいる。

(グラフ1、2)

②教員の長時間労働・過重労働の問題

長い間、教員は担当授業や職務の他に、半ば「暗黙の了解」的に部活動の顧問として、十分と言える対価のない中、慣例的に指導や引率に多くの時間を、それぞれ休日返上で費やしてきたが、ようやくここ数年でこ

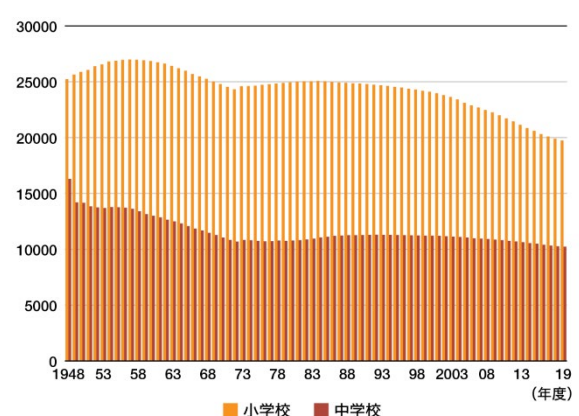
小中学校の児童・生徒数の推移



(文部科学省調べ)

▲グラフ1

全国の小中学校数の推移



(文部科学省調べ)

▲グラフ2

の実態を看過できないものとして捉えられ、教員の「働き方改革」が叫ばれる中、教員に代わる学校部活動の担い手として、地域の人的資源を活用しよう、というものである。

ただ、一口に「部活動の地域移行」と言っても、競技や活動内容によって利点や課題、具体的な方法は多岐にわたるため、各個別のきめ細やかな論議が必要となる。

トランペット奏者・作曲家として活動し、また吹奏楽での活動も多く行ってきた筆者は、特に今回は主に公立中学校の「吹奏楽部」を取りまく問題に焦点を絞って考えてみたいと思う。

地域の公立中学校の吹奏楽部の現状と全日本吹奏楽連盟の動向

特に都市部では地域外の私立中学校に進学を希望する児童が増加しており、東京都では2022年3月に公立小を卒業した子どものうち、19.4%が都内私立中への進学している。このことは当然先に触れた加速的な少子化に加え、地域の公立中学校の生徒数減少に拍車をかける要因となっている。

1990年頃までは中学校の吹奏楽部は概ね40名前後で活動を行っていた学校が多かったように思う。(表1)

日本で演奏される吹奏楽作品もその程度の人数を想定して作曲されたものが多く、また、レパートリーも豊富だ。しかし、現在ではスタンダードな吹奏楽作品を演奏するのに必要な人数を確保することが難しい学校が増えている現状から、国内の吹奏楽作品を取り扱う出版各社も少人数での演奏に対応した作品に力を入れており、例えば1つのパートを複数の楽器で演奏が可能で、最低数名のメンバーでも演奏が成立する、といったスタイルの作品を作曲家に委嘱するなどして多く出版してはいるものの、クオリティの面でまだまだ成熟したスタイルだとは言い難いと感じる作品も多く見受けられる。そういった観点、つまり単一校での活動では演奏することが難しくなったスタンダードな作品がレパートリーとして再び選択肢に入る、ということからも、吹奏楽部の地域移行には期待できる要素が多い。

■標準的な吹奏楽曲の編成と以前の一般的な中学校吹奏楽部(40名規模)のメンバー構成(例)

セクション	標準的な吹奏楽曲の編成		人数	
	楽器	パート	楽器ごとの人数	セクションごとの人数
木管楽器	フルート	ピッコロ	1	19
		1st	2	
		2nd	2	
	Bbクラリネット	1st	3	
		2nd	3	
		3rd	2	
	バス・クラリネット		2	
	アルトサクソ	1st	1	
2nd		1		
テナーサクソ		1		
バリトンサクソ		1		
金管楽器	トランペット	1st	2	16
		2nd	1	
		3rd	1	
	ホルン	1st	1	
		2nd	1	
		3rd	1	
		4th	1	
	トロンボーン	1st	2	
		2nd	1	
		3rd	1	
ユーフォニアム		2		
チューバ		2		
打楽器	打楽器(5パート程度)		5	5
			合計人数	40
※大編成構成楽器	オーボエ		1	4
	ファゴット		1	
	E♭クラリネット		1	
	コントラバス		1	
			大編成合計	44~

▲表1

このような情勢の中、吹奏楽コンクールなどを主催する全日本吹奏楽連盟が今年に入り「連盟加盟規定」と各種コンクール・コンテストの「実施規定」の一部改定を行った。改定の中身は主に地域の公立中学校の現状に配慮したもので、「加盟規定」「大会実施規定」双方で中学生が参加する部門の名称を「中学校部門」から「中学生部門」へと名称を変更し、同時に単一校の部活動単位での登録から、吹奏楽部の地域移行を見据え、地域クラブなど学校外で活動する団体でのエントリーが可能になった。これは非常に有意義で、歓迎すべき改定である、と感じている。

吹奏楽部の地域移行における意義

地域の中学校の吹奏楽の地域移行による利点として、主に3つの点が挙げられると感じている。

①通常編成吹奏楽の体験

人数的な制約により「吹奏楽」としては狭まりつつある活動の幅、多様性を複数校の生徒・地域の愛好家の結集によって再び取り戻せる可能性がある。以前まではスタンダードであった数多くの吹奏楽曲をどのパートも欠ける事なく演奏することが可能になるため、演奏曲の選択肢が増えることに加え、連盟の規約改定も手伝って、複数校や地域での合同バンドでの連盟主催の各種大会へ出場が可能になるため、活動自体の選択肢の幅が広がるのが期待できる。

②過度なプレッシャーからの開放

主に楽器を初めて3年目未満である中学生、ましてや楽器経験が1年未満の1年生の生徒にとって、その演奏スキルは当然のことながら発展途上であり、できるだけプレッシャーや過度な緊張感を排除して、伸び伸びと楽しさを感じながら演奏に参加できることができれば理想的である。メンバー一人一人の演奏全体に対する比重は当然のことながら、少人数バンドの中では大きくなり、その分責任を感じやすくなり、過度な緊張感や精神的な負担にもつながりやすい。

その点において、十分な人数で編成されたバンドの中で極力余計なプレッシャーを感じずに吹奏楽の醍醐味を体験できるような、地域移行ができれば生徒の上達、成長にとって理想的である。

③地域コミュニティへの参加

そして、もう一つには地域コミュニティへの参加によって生まれる新たな交流である。

吹奏楽活動の地域移行の方法として、地域の一般演奏団体が受け入れを名乗り出た場合や「受け皿」となる一般愛好家を含めた新規の演奏団体が設立された場合、多世代にまたがる「地域音楽コミュニティ」への大きな参加機会となり、学校内での部活動では生まれなかった地域との交流が生まれる。そして、その交流が地域の特性や課題を知るきっかけとなれば、音楽・吹奏楽を通じて、暮らす地域に今まで以上の愛着や当事者意識を感じ、ひいては地域共生にもつながる、「学校の部活動対策」を超えた有意義なムーブメントになる可能性がある。

吹奏楽部の地域移行における、課題・問題点

部活動の地域移行を巡っては、特に吹奏楽部特有の課題が指摘されている。

①設備面

合奏可能なスペース、場合によっては各パートに分かれて練習を行うスペースの確保をはじめ、ティンパニーや大太鼓、鍵盤打楽器など大型打楽器類を用意する必要がある。平日夜間や土日祝日など、授業が行われていない時間帯に学校の音楽室や学校の備品の大型打楽器などを使用できれば理想的ではあるが、その場合は学校設備を市民に開放するための制度やガイドラインの作成を行政と連携して行わなければならない、一朝一夕には解決が難しいことが予想される。

②指導面

楽器によって演奏方法が異なるため、全ての指導を1人の指導者で行うことが難しく、合奏指導と技術指導を分けて考える必要があり、合奏指導者とは別に各楽器の技術指導者が必要となる。そのことに加え、これまで教員が行ってきた部活動の運営マネジメントや生徒のメンタル面のケアなど、音楽面以外の要素についてフォローする指導者も必要になることが予想される。

③活動面

公立中学校の吹奏楽部が地域の「受け皿」となる一般愛好家を含んだ演奏団体に合流し、なおかつ「中学生部門」として連盟への加盟や大会への出場を希望した場合、少なくとも大会に向けての練習時期においては中学生のみが独立して活動を行うことも必要になってくるなど、団体運営に工夫が必要となる。また、現状中学校の吹奏楽部の活動が、平日4日間の放課後と土日のいずれかの合計週5日であることが一般的であるのに対し、一般吹奏楽団の活動は概ね週1回である。楽器の上達にはそれ相応の時間を費やすことが必要不可欠で、特に中高生の期間の上達は技術指導や効率の良い練習方法の習得はもちろんのこと、それ以上に楽器に接している時間をいかに多く確保できるか、によるところが大きく、週に一度の活動では期待通りの上達を見込むのはなかなか難しい。吹奏楽部の地域移行はまずは週末の活動から試行される、との方針であるようであるが、なるべく早期にほぼ毎日短い時間でも楽器に接する時間を設けられ環境が整備されることが望まれる。

④費用面

これまでの公立中学校の吹奏楽部の活動では、部員1人につき月額1,000～3,000円程度を「部費」として徴収している学校が多く、またその他にも演奏会費やコンクール・コンテストへの参加費、遠征費、夏休みなどに合宿を行っている学校は合宿費、楽器関連の消耗品の費用など、年間40,000～50,000円程度の負担があることに加え、多くの学校では担当楽器の個人購入を推奨していることを考えると、吹奏楽部での活動は決して「安上がり」とは言い難い。それに加え、活動が地域移行となれば、毎回の練習会場費、楽器運搬費、など検討しなければいけない出費が増えてくることが予想される。またそれに追い討ちをかけるように、昨今の世界情勢や経済情勢による物価上昇によって、楽器や消耗品の価格も急激に高騰しており、この事はそもそも吹奏楽始めることをためらう要因になってしまう懸念がある。

指導者に求められる資質と地域社会全体でのサポート体制

従来の学校吹奏楽の指導は主に顧問である教員が担っていた部分が非常に大きい。

教員としての「本業」の合間を縫って、演奏当日には指揮者として生徒と一緒にステージを共にし、またその日のために日々指導にあたるのはもちろんのこと、部活動運営のマネジメントや引率、生徒のメンタル面のケアなどを行い、その上で外部講師が技術指導者としてサポートする、という形が多く見受けられた。

今後、部活動が地域に移行されれば、それらのことも含め、地域の愛好家や外部指導者が担う可能性がある。

特に技術指導に携わる事になる指導者は、吹奏楽活動を行うことが生徒一人一人の将来に対して有益に作用することを目的に指導にあたるよう、今まで以上に注意を払う必要があるだろう。

また、現段階では吹奏楽部の地域移行は、「受け皿」となる場をどのように確保するのか、運営体制や指導体制をどのように確立するのか、など議論の進捗に自治体間・地域間の差はあるにせよ全体的には不確定な要素が多く、故に吹奏楽部の地域移行にはもう少し時間かかると予想する見方が多い。技術指導に関しては特にプロの演奏家・指導者の少ない都市部以外の地域では、楽器個別の指導に至るまで地域の愛好家や愛好家団体に委ねられるケースが今まで以上に増えることが予想されるが、その場合、楽器初心者にとって論理的な基礎的技術習得が特にその後の上達に大きく影響を及ぼすことから、例えば行政側で地域の愛好家指導員に対してプロの演奏家を講師に招いた指導技術研修制度を導入するなどの方策があると望ましいと考える。つまりは、行政、学校、プロの音楽家・外部講師、地域の愛好家が、地域の特性や学生本人や家庭のニーズを重視しながら連携して地域社会全体で地域の学生の部活動をサポートする必要があり、かつこれらの点についての重要性の理解に対して前向きな人材が求められると感じる。

また、部活動に対する生徒本人及びその家庭の求める位置付けやニーズも様々であることから、指導者側が従来の画一的な指導から脱却し、生徒の個々のケースに合わせた適切な指導を行う必要がある。部活動を生涯学習のスタートとして位置づけるのであれば、特に地域の多世代にわたる人々と活動を共にするのは非常に有意義である一方で、以前からテレビ放映など吹奏楽が話題になったこともあり「コンクールで仲間と一緒に金賞をとりたい」というニーズもいまだ根強くある。「大会での成績至上主義からの脱去」という議論も耳にするが、一方では生徒の「向上心」を喚起することは重要であるので、サポート側が密に連携して運営方針を策定する必要があるだろう。

おわりに

この文章を執筆中に2022年の出生数が80万人を下回った、とのニュースが話題になっている。このニュースに対して「想定より8年早いペース」との付随情報もセットで報じている報道機関が多いが、出生数の減少のペースの加速度として分かりにくかったので調べたところ、これは2017年の試算を基にしており、その時点で13年後と想定していた予測値にわずか5年で到達してしまったことになる。なるほど驚くべき少子化のペースである。

そしてこのことは当然のことながら、10 数年後に向けてさらに圧倒的なペースで中学生の人数減少、学校の空洞化が進行することを示している。日本の将来的な文化・芸術振興、青少年の健全育成に直接的に寄与する公立中学校の部活動の、時代に即した新たな、そして合理的なあり方を確立すること、またそれと同時に、行政、学校、地域社会、専門家が一体となった教育に対するサポート体制の構築が待ったなしの急務である。

そして、音楽家である筆者は特に若い世代の音楽家、音楽家を目指す学生に向けて、地域貢献の重要性に対する啓蒙を微力ながら行なっていきたい、と感じている。

参考文献

文化庁 文化庁活動の地域移行に関する検討会議（第7回）資料1

「文化庁活動の地域移行に関する検討会議 提言」

https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/sobunsai/chiiki_ikou/07/pdf/93750901_02.pdf

文化庁・スポーツ庁

学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン（令和4年12月）

https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/sobunsai/pdf/93813101_01.pdf

https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/sobunsai/pdf/93813101_02.pdf

https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/sobunsai/pdf/93813101_03.pdf

総務省

平成29年度 第2回過疎問題懇談会（説明資料3-1）

https://www.soumu.go.jp/main_content/000513102.pdf

全日本吹奏楽連盟

規定改定について

http://www.ajba.or.jp/00ajba/07_pdf/kitei/kitei_kaitei20230120.pdf

NHK 「解説委員室」

コラム『どうなる？ 部活動の地域移行』（2022年06月22日 二宮 徹 解説委員）

<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/470115.html>

NHK NEWS WEB（2023年1月21日）

吹奏楽コンクール 部活地域移行で参加条件を見直し

https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230121/k10013955891000.html?utm_int=nsearch_contents_search-items_005

読売新聞

文化庁、吹奏楽部に特化した支援へ…「地域移行」円滑に推進（2022/08/20）

<https://www.yomiuri.co.jp/culture/music/20220819-OYT1T50317/>

読売新聞

22年の出生数が初の80万人割れ、想定より11年も早く…首相「危機的な状況」（2023/02/28）

<https://www.yomiuri.co.jp/politics/20230228-OYT1T50275/>

ニュースサイト nippon.com

本番迎える中学受験：東京では小学生の2割が私立に進学（2023.01.11）

<https://www.nippon.com/ja/japan-data/h01557/>

ニュースサイト nippon.com

『1年で200以上の小中学校が姿消す：児童・生徒数も最低を更新』（2019.08.26）

<https://www.nippon.com/ja/japan-data/h00529/>